

令和5年度第2回岡山市総合教育会議

日時：令和5年11月21日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時28分 開会

○司会 定刻となりましたので、ただいまから令和5年度第2回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 いいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 はい。

○司会 では、傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、お願いいたします。

○市長 はい。それでは、次第に沿って議事を進めます。

本日は、不登校児童・生徒の支援のための取組について報告をしていただき、それらを踏まえて今後の課題や取組の方向性などについて議論していきたいと思えます。

協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めての出席となります門原教育委員がいらっしゃっております。一言ご挨拶をいただきたいと思えます。

○門原教育委員 それでは、失礼いたします。このたび教育委員に就任いたしました門原眞佐子と申します。小学校の教育現場や教育行政を経験いたしまして、現在は大学で教員養成を行っております。チーム教育委員会ということで頑張っていきたいと思えます。どうかよろしくをお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

それでは、議事を進めます。

前回に引き続きまして、岡山市中学校長会の溝手会長、岡山市小学校長会の平井会長、昨年度、第2回目の会議に引き続きまして、岡山大学大学院教育学研究科の高瀬教授にご

出席をいただいております。また、今回新たに吉備小学校の奥橋校長、そよかぜ平福の小亀室長、岡山大学教育学研究科の山内講師にも来ていただいております。6名の方々にも総合教育会議の議論に入っていただきたいと思います。

それでは、初めてご出席の方に自己紹介をお願いしたいと思います。奥橋校長、お願いします。

○奥橋小学校長 失礼します。吉備小学校の校長をしております奥橋と申します。本日は校内支援教室のことについてご報告に参りました。また、後でお話をさせていただこうと思います。よろしくお願いします。

○市長 じゃあ続きまして、小亀室長、お願いいたします。

○小亀室長 岡山市では5室目になります岡山市児童生徒支援教室の室長の小亀昌子でございます。よろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

次に、山内講師、自己紹介をお願いいたします。

○山内講師 失礼します。岡山大学の山内と申します。養護教諭の養成をしていて、「考えよう不登校」プロジェクトで関わらせていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

それでは、議事を進めます。

資料について、教育委員会から説明をお願いいたします。

○教育長 はい。それでは、教育委員会の資料をご覧ください。

今回の協議事項として不登校児童・生徒の支援のための取組について取り上げていただきまして、ありがとうございます。資料の説明に先立って、8月に行われました第1回総合教育会議でいただいたご意見について3点、口頭にて報告いたします。

まず1つ目、学校で子どもの心を見える化する取組が子どものやる気や学校に行く楽しさにつながっているというご意見がありました。岡山市では、先生方の経験に基づいた子どもの把握に加え、ASSESSやi-checkなどの質問紙調査の客観的なデータを併せて、子どもの心の状態や小さな変化を見取るようにしています。教育委員会では、データの分析、活用方法などについて研修やリーフレットを通じて学校に周知し、学校の取組を支援しております。

次に、やる気につながる好奇心が育っているか検証していくべきとのご意見がありまし

た。教育委員会では、3年間のコロナ禍の影響を鑑み、第2期教育大綱で目指す5つの力の育成に向けて、今年度から「やる気につながる好奇心の醸成」に取り組んでいます。その取組状況については、昨年度の第3回総合教育会議でご協議いただいた2つの指標で見えていくことにしています。その2つの指標とは、2つの視点を設けて振り返りをしている学校の割合、学校の授業は分かりやすく楽しいと感じる子どもの割合です。また、やる気につながる好奇心が醸成されたかどうかについては、第2期教育大綱で育む5つの力を測る4つの指標で見えていきます。いずれも第3回の総合教育会議で報告させていただく予定です。

最後に、ICTの活用率の向上はもちろんのこと、ICTのよりよい使い方というご意見がありました。現在さらなる活用が求められている学校には、教育委員会が直接訪問し、活用促進に向けて支援をしているところです。あわせて、活用率の高い学校はどのような使い方をしていくのかを収集しており、今後、効果的な活用事例を広く周知していきます。

以上、口頭ではありましたが、第1回総合教育会議を受けての報告となります。

続いて、本日の協議題である不登校児童・生徒の支援の取組について説明いたします。

資料1をご覧ください。

第2期教育大綱で目指す、自らの個性を磨き、選択と挑戦を繰り返すことができる子どもを育成するために、特に向上心、社会性、人権尊重の精神の基礎となる目標として、新規不登校児童・生徒の出現率を0.47%以下に抑えることを設定しております。

第1期教育大綱の取組から継続して、現在各校では子どもが連続で3日欠席した場合に家庭訪問を行ったり、10日以上欠席している子どもには支援計画を作成したりして組織的に取り組んでいるところです。加えて、医療・福祉・就学前教育などの関係課や関係機関との連携をさらに進めています。

昨年度からは、参考資料1にあるとおりで、今日もおいでいただいておりますが、岡山大学との協働研究プロジェクト「考えよう不登校」の取組を立ち上げ、大学の先生が学校を訪問し、岡山市における効果的な不登校対策について一緒になって考えているところがございます。

資料1をご覧ください。

本日の資料は、岡山市が目標としている新規の不登校を中心に、今年10月に公表した令和4年度のデータを取り上げています。

令和4年度の小・中合わせた新規不登校出現率は1.18%でした。この数値はグラフにあるように全国では令和2年度から急激な増加が見られておりますが、岡山市は全国と比べると緩やかな増加となっております。

その要因としては、先ほど報告した学校における質問紙調査等を活用した子どもの心に見える化する取組が定着してきたことに加え、就学前から一貫して子どもを育てる岡山型一貫教育により、小1プロブレムや中1ギャップが抑えられていること、また定期的な中学校区での情報交換会や年度末に小学6年生と新中学1年生担当教員が引継ぎの会を行ったりするなど、計画的な取組が一定の効果を上げていると考えています。

次に、学校での取組について、資料2をご覧ください。

こちらは子どもの状態に応じた支援の充実を図るための学校の組織的な対応を示したものです。

不登校の未然防止に向けては、まずは子どもが安心して学校生活を送ることができるよう、学習支援、集団づくり、子どもの状態把握などに力を入れています。遅刻や欠席、保健室の利用がしばしば見られる場合には、家庭訪問や子どもの困り感をつかむための教育相談の実施や個別に支援計画を作成するなど、丁寧な対応を行っています。欠席が多い子どもに対しては、別室登校や放課後登校の提案等、学校でできることはもちろん、必要に応じて外部の関係機関と連携した対応を進めます。子どもの状態に合わせた対応を本人、保護者と相談しながら組織的に進めることは重要であると考えています。

続いて、資料3をご覧ください。

こちらは不登校児童・生徒の欠席日数別の主な取組です。

不登校児童・生徒の欠席の状態は様々です。この資料では欠席日数に対応した教育委員会の主な取組をお示ししております。本日は報告1として、校内支援教室調査研究の取組を吉備小学校の奥橋校長からしていただきます。具体的な取組はこの後ご報告いただきますが、不登校支援の在り方について調査研究を進めるために新たに設置したものであり、2年間かけて岡山大学の先生方にも「考えよう不登校」プロジェクト協働研究で積極的に関わっていただき、あらゆる視点からの効果分析を行っていかうとしているものです。

また、報告2として、市内に5つあります児童生徒支援教室のうち、昨年4月に開設して2年目となるそよかぜ平福の小亀室長から報告をしていただきます。

こうした新たな取組も進めてきているところではありますが、不登校は増えている現状があります。

今後さらに充実させる取組について説明いたします。

資料1に戻ってください。

1つ目は、先ほど申し上げた校内支援教室調査研究についてです。2つ目は、多面的に確かな児童・生徒理解を行い、児童・生徒が他者のよさを認め合える学級集団づくりを進めるための質問紙調査等のさらなる活用を進めます。3つ目は、授業配信や教育相談の支援の充実に向けたICT活用の充実に努め、向上心、社会性、人権尊重の精神を育み、新規不登校児童・生徒の減少を目指してまいります。さらに、子ども一人一人の社会的な自立に向けた指導や支援を充実させるため、不登校を中心に岡山市教育全体を俯瞰し、これまでの授業を組み直すことも考えてまいりたいと思っております。

説明は以上です。よろしく願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

それでは次に、奥橋校長からご説明をお願いいたします。

○奥橋小学校長 失礼します。吉備小学校の奥橋でございます。

私からは今年度、校内支援教室で取り組んでいることを簡単に説明させていただきます。

不登校の兆候がある児童の初期対応であるとか、また長期欠席、不登校から学校復帰を目指したステップとして、安心して落ち着ける場所で個別の学習指導や相談支援を受けることができれば、子どもたちが学習や進学への意欲というものを回復する効果があるのではないかということを考えて取り組んでおります。今年度設置していただいた校内支援教室を生かし、不登校対策に係る取組を行う中で、岡山市は出現率を0.47と設定しておりますが、本校は昨年度までの実績から新規不登校児童の出現率が0.42以下というところを目標として現在取り組んでおります。

まず、支援教室の様子をお伝えします。朝登校しますと職員室に個人のファイルがあり、そのファイルを児童が自分で持って教室に行きます。そして、自分の学級の時間割を確認した上で、担当の教員と1日の学習の予定を確認していきます。学習の内容については、この部屋に入る前に本人と保護者、そして校内支援の担当教員で相談しているものが前提になりますが、その学習内容を踏まえて、支援室での個別の学習とするとか、教科によっては自分の教室へ戻って勉強するとか、そういったことを自分で決定をして、1日の学習方法を相談して本人が進めていくことになっております。

次に、様子を見ていただきますが、これが個別の支援をしている様子、また教員がつけ

ないときには、クロームブックを使いながら自分で調べたりだとかプリント学習をしたりだとか、こういう形で1年生から6年生まで全体で14名ほどいますけれども、子どもたちがそれぞれのスタイルで勉強しています。

では、不登校の兆候がある児童・生徒の初期対応について簡単に説明させていただきますと、これは通常の教室が中心ですが、日々の学校生活では担任の先生を中心にしながら子どもの様子を観察したり、学習等に集中できない子どもについては、状況によっては支援員がそこに携わったりしているという状況です。中でも学校の入り口となります小学校1年生に配置されている岡山っ子スタート・サポーターは、就学前との大きな環境の変化であるとか学校生活に慣れることができない児童に対する支援に向けて非常に欠かせない状況であります。

私も実際に見てみると、子どもは入学式には保護者と一緒に入学するので問題ありません。うちは200人を超える子どもがいるのですが、翌日から校門で、泣いてしまう子どもが2人いた。おうちの人と別れるのがつらくなるというような状況であったり、おうちの人と一緒に教室まで行くのだけれど、そこから入れなかったりとか、そんな状況が大体一ヶ月ぐらいは続きます。そういう中で、支援員と一緒に関わったり寄り添ったりすることで、子どもはだんだん落ち着きを戻していきます。その後でなかなか入れないということになると、先ほど言いました支援教室へ行って気持ちを落ち着けるということ今年度はしております。

また、徹底している取組というのは、これは数年前から教育委員会の呼びかけに応じてやっていることですが、欠席が3日続くと、電話連絡ではなくて、実際に家庭に訪問して子どもの様子を見ることです。これはコロナ禍のときはなかなか難しいものがあったのですが、今年度はこれがきちっとできているという状況です。また、これは年間で欠席が10日を超えた場合は個別の支援計画を作成しています。これは引継ぎ等を含めて子どもたちの様子を見ていくというところです。

3つ目に上げている登校状況観察シートというのは、これは本校で独自に作っているシートですけれども、子どもが来たとき、例えば校門をくぐったとき、またはげた箱の様子、教室をくぐって入り口に入ったときの表情がいつもと違うとか、またはノートの字が最近乱れているとか、ちょっとした兆候でも見つけて、教員がアンテナを高くして子どもの変化をしっかり読み取ろうと、そしてそれを教員等で情報共有をしようということで、週に1回、情報共有の時間を設けて取り組んでいるものです。こういったものをしな

がら子どもの観察、ちょっとした変化を読み取っていかうということにしています。

これは活用については、まだ十分ではないのですが、年に3回するASSESSの質問紙調査や、i-checkの情報は非常に役に立ちます。子どもが集団にどのくらい適応できているか、またその集団はどのような課題をもっているかについて非常に見やすくなって、担任が学級経営をしていく上では貴重な財産になっています。

ただ、これを客観的に見ていただいて他に活用方法がないのかということは、できれば岡大の先生方と一緒に調査ができればなと思っています。先ほど申しあげましたスタート・サポーターとか支援員がどう関わるのが効果的なのかも一緒に研究調査させていただければ、何か糸口が見つかるのではないかなと期待をしているところでございます。

最後に、本校の校内支援教室の特徴を簡単にまとめてみました。先ほど申しあげたことにも重複するところがあるのですが、まず1つは校舎とは別棟であるということが非常に子どもたちにとってはいいみたいです。体育館の2階にあるカーペット敷きの14畳ぐらいの部屋で子どもたちは生活をしています。ICT環境も整えていただいて、自分の教室とのオンラインでつながることも可能な状況になっています。

3つ目に上げている、教員が配置されているということですが、今年は加配教員を1人いただいて、それが専属で入っています。これがとても大きいです。今までは支援員だったので授業を行うことができなかったのですが、教員が入ることによって授業も可能になりました。先ほど申しあげたように、子どもが自分で学習計画を立てて勉強するということへのアドバイスであるとか、学習環境として、教室を選ぶのか、または支援教室を選ぶのか選択するときの相談であるとか、また自分の学級の学習進度を気にしながら、そこに合わせながら学習または学び直し、そういったことを可能にする状況であるとか、そして一番下が校内にある特徴になりますが、毎日クラスの友達と担任の先生と顔を合わすことができます。これが長期の不登校につながらない点かなと思っています。

私はまだ半年ちょっとなのですが、実際に携わらせてもらって、支援教室に来ている子どもは教室が嫌だと飛び出している子が多いですけれども、実際にこの部屋に入ると皆さん勉強します。学習意欲をもっているということですね。教室に戻りたいという気持ちももっています。改めて第1期教育大綱で挙げていました、やっぱり学力は子どもたちのいろんな学習意欲も含めて救うものだなと。だから、改めて学力、そして不登校対策というのは、学校には欠かせない柱だなということをつくづく感じたところでございます。

この支援教室自体がまだ岡山市に3個しかなく、これが今後どのように広がるのかとい

う点と、中学校にはまだないと聞いていますので、うちの学校でこの支援教室にいた子どもが通常のクラスに戻らないまま卒業したとしたら、中学校に進学した際、どのようにつなげていけばいいのかという点が少し課題であるので、ここについてはまた研究しながら対応も考えていかないといけないと思っております。

私のほうからは以上でございます。

○市長 奥橋さんは半年なのでしょうけれども、この校内支援教室そのものは、吉備小はいつから。

○奥橋小学校長 今年から。

○市長 やっぱり今年で半年強と。効果の話は最後、定性的にお話しされていましたが、定量的評価みたいなものはあるのですか。

○奥橋小学校長 いや、そこはまだきちっとしたものが出てないので、そういうものも含めて、大学とそこは出さなくてはいけないなと思っています。

○市長 分かりました。

それでは、小亀室長、お願いいたします。

○小亀室長 失礼します。そよかぜ平福は学校ではありません。教室も学校も嫌になってしまったという子どもたちが来ています。昨年度開設で、まだ1年半ほどたったところです。岡山市南区三浜町一丁目1-19、対象は小学生だけです。平福コミュニティハウスが1階にあり、2階がそよかぜ平福、それから外に野菜を育てるところがあります。部屋は2階へ上がり、玄関を入ると、中庭が吹き抜けになっており、コの字型に部屋が配置され、集いの部屋、ゆったりルーム、プレイルーム、待合相談室というふうに囲んでいます。

集いの部屋では座ってできるような活動、ゆったりルームという小さい部屋では、静かに過ごしたい人、一人になりたい人などが過ごしています。プレイルームは天井が少し低いのですが、子どもたちが集まったり、運動や活動をしたりする部屋で、廊下にも玩具を置いてあります。外では野菜やお花を育てています。

小学校専用であるため、発達段階に合わせた支援がしやすく、施設の規模は小学生に合わせています。静かで伸び伸びできます。子どもの内訳は、昨年度6月から通室になった子どもたちが昨年度のところ8名おりました。そのうち継続した子どもが7名で、11月現在、12名の子どもたちが通室しています。在籍校は異なっています。

特徴としては、多様で個々に異なる背景や要因を持っていますが、どの子も傷ついてい

ます。発達段階が幼い、それから個人差は大きいのですが、表現力等が未熟で、自分の困っていることを表現できない子どもが多いです。それが感覚の過敏さや母子分離不安に現れている場合もあります。多くの子が素直で真面目です。右上がりに直線で伸びるのではなく、ずっと待っていると突如蓄えた力が成長したと、こちらがはっきり分かるぐらい見える成長ぶりを見せるときがあります。学習意欲というものは、今もう傷ついているので、まずは安心した生活を送った後、芽生えてくるのではないかと考えています。

スタッフは8名おります。心理士の相談員が1名、指導員が4名、補助員が3名、月1回研修に来てくださる専門相談員が1名となっています。

岡山市の方針として、付けたい5つの力があるのですが、そよかぜ平福では子どもに合わせた5つの力に代えさせてもらって目標にしています。学校に行かないということはあまり考えず、自分を育てる、そのことが学校に戻る、自立するのに必要ではないかと考えて、まず好奇心を潰さない、自分で選択する、決める、そして相談、協力できる、こういう子どもを育てようとしています。まずは安心した居場所づくりのために相談員に慣れる、このことがとても重要です。

やっとなら行けるかもしれないということで予約は取られるのですが、昨年度、八百数件、今年度、五百数件ある相談件数のうち、予約しても家から出ることができない、車から出ることができない、玄関に入れない、もうとてもじゃないけど、ここにはおることができないというお子さんもいっぱいおりました。相談員にまず慣れ、そして慣れてきたのを見計らって部屋を見て回ったりスタッフを紹介したりして、二、三ヶ月たったら、スタッフに慣れてきたな、長くいたいなということで通室に結びつけています。その後、ほかの子どもに慣れることをしています。これもほかの子の後ろをもう脇目も振らずに通過したり、通り道ではなく遠回りをしたりという、なかなか受け入れないときには、だんだん受け入れることができるようにしています。

大体のお子さんが相談に来て二、三ヶ月たった頃、安心できたら継続したいなということで、通室のほうに移っています。長いお子さんは1年以上かかっています。入室になって必ず、前室長も申し込んでいたのですが、この3つのことを言っています。ありがとうということと、今のままでいいということと、したいことをしよう、したくないことはしなくていいという、このようにやめたかったらやめてもいいし、誘ってもいいけど断られるよということも言っています。

1年目の成果と課題は、安心した居場所として継続した通室ができたのですけれども、

子ども同士の関わり、それから中学校への円滑な就学指導・支援に関しては弱い面がありました。そこで、2年目の支援としては、相談は1年目と同じ、この小集団活動というのを個別支援といってスタッフが2人担当になって子どもの希望に添ってする活動と、小集団といってスタッフも子どももばらばらだけど、その人たちと関わる、この2つの活動を組み立てました。

個別支援においては、自分だけの時間に、担当のスタッフと大人が2人いると思います。自分のしたいことをします。時々ほかの子どもたちの気配を感じて、あっ、いるのだなというようなことを思っています。次は、きらきら小集団活動についてです。これは相手もいいよ、自分もいいよという状況で活動しています。いろんな友達やスタッフとしたいことを組み立ててやっています。

これはある子どもの1週間です。リズムをつけるといいので、担当2人との時間が火曜日の午前中、そして黄色がついている月水金のきらきらという小集団の時間は週2回まで来ていいということにしています。

活動の流れは、受付をします。まず、書くのが苦手、面倒くさがりという子どももいましたので、タブレットで入室の手続をします。そのことはスタッフルームにそのまま配信されていて、この子どもはこういう状態なのだということを把握しています。次に、集いの部屋というところのホワイトボードに書いた、したいことについて自分がしたいことに正しいという字を入れていきます。決まらない人はスタッフが依頼していることから選んでもいいです。3番目に活動を始めます。時間や回数をあらかじめ決める。ルールも子どもたちで決める。途中でやめても変更してもいい。スタッフの助言は聞いてほしいなど思っています。最後、帰るときに振り返りをしています。今日の気分はメーター10までで表して、理由も書いてもらっています。これはファイルしています。

私たち8名のスタッフは、休みの人たちもいて、情報を共有する必要があるので、児童理解支援シートという細かいもの、それから日々の子どもの活動の様子、課題も書いています。ケース会は月1回、専門の先生からご助言をいただいています。朝礼等での共有もしています。心がけていることは、入って間がない子どもに対しては、子どもの声の大きさ以上、子どもの声の圧以上のものは出さないようにしています。こそこそ声でしゃべるお子さんなら、こそこそ声で返すように努力しています。子どものペースにとことん合わせています。きらきらと、それから個別支援の違いは私たちが付けています。

ちらっと視線が動くので分かるのですが、意図的に好奇心を持つことができるもの、選

んだり決めたりできるもの、1人で遊べるもの、または一緒に遊べるものを取りそろえるようにしています。なかなか子ども同士が関わる機会というのを昨年度、特にもてなかったため、昨年度は目的をもってワークショップを2回、マジックショーを開いて、子ども同士を関わらせました。今年は、「自分はいていいんだよ、一緒に楽しんでもくれる人がいるよ」ということで、手つなぎ、初めの一步と、それから宝探しをしました。マジックショーについては、ハイブリッドで家や別室で参加してもいいことにしました。

また、バスに乗ったことがないけど、音楽鑑賞会には行きたいという要望があったので、一緒に行きました。ファジアーノからも交流のお誘いがあったので、一緒にしていただきました。これはファジアーノの方々のご理解もあったので、子どもたちが急速に近づいて急速に手をつないだり協力したりという場面が見られました。いずれの活動についても、急にこの場面でするのではなく、個別支援の時間に必ず練習、方法等を教えておいて、この場に臨むようにさせています。

他機関との連携については、支援検討会、支援シートを使って学校とそよかぜで情報交換をします。ケース会、これは専門の相談員の先生にご助言をいただいています。オープン支援教室は、夏季休業中に学校の方が施設に来て見学をするものです。ICTを活用した支援は、積極的に進めているところです。受付、それから各種イベントのチラシ、参加、振り返り、子どものタブレットに配信して、子どもがそこから見たり、打ち込んで返したりをしています。もう一つ、クラスルーム、子どもとそよかぜ用にそよかぜ平福No.11、学校と他室用にフラットそよかぜを立ち上げています。

4番目、もくもく自習室、これはMe e tを使って、火曜から金曜の1日2回、面倒くさそうなことは一緒にしようよということで、スタッフルームから、これから始めます、今日することはありますかということでしてます。これはそよかぜ平福にタブレットを持ってきて勉強しているところです。それから、自宅で参加するお子さんもいます。ほかには学びに活用ということで絵が得意なお子さんとは絵しりとりをしたり、ルービックキューブの解説書を書きたいという子とはルービックキューブの解説書を書き上げるところまで付き合ったりしています。それから、今練習しているのは、Me e t内でお楽しみ会をしようということで操作の練習を子どもとしているところです。

成果としては、安心した居場所として継続して来てくれているな、自分を育ててくれているな、困ったこと、嫌だったことを自分からしゃべるようになったなというところで

課題としては、集団活動に移行できる状態になったとき、ちょっと共有の難しさがあるかなということと、受入れ人数に限界があるなということです。ただ、この点については、ICTを活用して、家にいる子どもとつながる工夫はしていきたいなと思っています。小学生のみということで、中学校への円滑な就学支援、他室や他機関、アウトリーチ等の紹介をして安心した就学につなげたいと思っています。また、働いているおうちの方もいるので、時間の制約、保護者送迎というところは制約になっているかなと思っています。

以上で終わります。ありがとうございました。

○市長 ありがとうございました。

今までの説明に関しまして、山内講師、ご意見をお願いいたします。

○山内講師 失礼します。まずは、吉備小との取組について大学で考えていることですが、まだ始まったばかりというか、これからという話になるのですが、まずは実態把握をしっかりさせていただきたいと思っています。大学のプロジェクトのメンバーとしましては、私は健康面を見たりですとか、あとは特別支援の教員であったり、体育の教員、運動のことは見たりだとか、あとは地域と連携した取組も積極的にされている先生もいらっしゃる、学校の経営とか、そういった面で見てくださいる先生もいるので、いろんな視点から学校というものを見させていただきたいと思っています。

そういった実態把握とともに、教員の先生の子どもに対しての実態把握というのもすごく重要だと考えていて、登校状況観察シートの活用についておっしゃっていたので、そこもしっかり見させていただいて、どんなものかというのを一緒に考えていたりしたいと思っています。その中で、今ある資源があると思うのです。もともとある取組だったり、ボランティアの方だったり、あとは先ほども言われていたASSESSとかi-checkとか、実施時期がどうなのかも含めていろいろ考えて、つながって取り組んでいければうれしいと思っています。

量的な評価というのももちろんそうですけど、不登校というのが一人一人違うというのがすごくあって、一人一人が違うし、中学との連携というふうにおっしゃっていましたが、小学校のうちでできることと、もうちょっと待たないといけないこと、そういうその子の一生を見据えて取り組んでいくということがすごく重要になってきますので、そういった考え方とか、そのようなものを先生方や支援員の先生方と一緒に考えていきたいと思っています。

あとは、児童・生徒支援教室のことについても、市教委の先生方と話をすることがあるのですが、できたらオンライン支援の充実ができたらという話で、例えばもくもく教室、すごくいい取組をされていて、まだそこまで行けないような子も自宅で受けることができるかもしれないということと、オンラインであるので、個々の教室が一緒になってできる取組ではないかと話しているの、何かそういうことも、もし広げられたらいいですねという話をしています。

○市長 続いて、高瀬教授、お願いできますか。

○高瀬教授 ありがとうございます。いろいろお話を伺っていて、1つキーワードになっているのは子どもたちの学習意欲なのかなという部分はすごく感じました。子どもたちを待つということも、状況によっては待つということもありますし、顔を合わせることによって何か自分の今の位置を意識するみたいな部分というところがどちらもあって、学習意欲といったところに非常に強く意識としてあるのかなと思っています。今、山内講師のほうからありましたように、不登校の問題を考えると一人一人というところが絶対に大事なところで、その部分を見ていくという意味では、非常に丁寧な児童理解といったところに基づいた取組がなされているのだなということを感じました。

子どもが今ここをやっていって、その後どんなふうになっていくのかを考えていったときに、中学校区全体で見ていくということはすごく大事かなと思います。そのときには当然幼稚園、保育園とこども園というのが入ってきて、そこと合わせた、岡山市がずっとやってらっしゃる岡山型一貫教育という部分をしっかりこの不登校を解決するという観点から捉え直してやっていくことが非常に重要なんじゃないかなというふうに思っています。その上で、そのときそのときの状況を踏まえた一人一人の違いといったものを見極めていくと。そうした部分があるのかなと思います。

丁寧にやっていくといったところは、ある意味、先生方は得意な部分ではあるのですが、その部分をちゃんと岡山型一貫教育として適切にといいますか、見通しながら、みんなでやっていくという部分は、せっかく岡山市がやってきたことですし、岡山市の特色でもありますので、そうした観点から評価していくということが重要かなと思っています。

そういう意味で、定量的な評価と市長さんからもありましたけれども、最終的な評価はその不登校が減っていくというパーセンテージに出るのですが、多分その間の指標みたいな部分がしっかり開発されて、その指標の数字はこうですよという、だからよくなって

いっているというところが、岡山市としてどう育てたいか、先ほど支援教室でも出ましたけれども、その力で指標をしっかりと開発していくところから、また大学としても取り組めていければ、定量的な評価という意味でも岡山市らしさとか実質的に役に立つデータが出てくるのではないかなと思った次第です。

○市長 どうもありがとうございました。

じゃあ、校長会のほうからご意見いただけますでしょうか。

○溝手中学校長会長 失礼いたします。本校でも不登校の生徒がおります。資料1にある、多面的、的確な児童・生徒理解、まず未然防止というのが僕は一番かなと思っています。まずは不登校を生まないというか、不登校にならないようにするためにどうするかということを第一に考えています。

それはi-checkというものであったりASSESSというもので、勘とか経験タイプの教員が多くて、我々というか、私はかもしれませんが、明らかに数字で出てきたり、場所というか、形で出てきたりするので、教員も、「この子、そうなんだ」ということで気付くことがあります。それも必ず学年でそのチームで話し合っ、状況によっては本人に事情を聞くとか保護者と話をするとかということで、もうそこでこの子の考え方とか性格のようなものが出てきたりするので、かなりの意味で未然防止につながるかなということがあります。

それから、次は勉強を分かるようにするというのももちろん大事で、今ちょうど期末テストも近づいているのですが、そういうときには学習会を開いて先生が学習をさせるようなことも大事なことかなと思っていますし、そういうことが未然防止につながってくるかなということ。それから、学級集団づくりも結構子どもたちにしか見えない人間関係というのがあったりするので、本校では6人の班長というのが毎回変わるのですが、2ヶ月に1回ぐらい班長を選んで、班長会を開きます。そういう中で教員が子どもの考えを聞き取るとか、もちろん本人から聞き取るのは年に2回、教育相談というのをやっておりますし、そういう中で、とにかく未然防止を頑張ろうということを私は言っています。

それでも不登校の生徒は出てきます。そうするとカウンセラーの先生には学校として非常に助けられています。1週間に1回3時間半、30分1枠で7枠あります。今年は少し不登校の子どもも減ったのですが、去年はもう7枠に入り切らないので、申し訳ないけれど、次の週でお願いしますとかいうことになります。少し待たされた感があるかなということも考えていたりします。カウンセリングを受けることによって救われる子、それから

直接なかなか聞き取ることもできないのですが、我々もコンサルテーションを受けることができるということも大きなことかなと思っています。

それから、中学校には相談室へ不登校の子を受け入れて、不登校児童・生徒支援員がいます。その支援員さんが週に4回から5回来てくれるのですが、そういうところにも来て学習に取り組むとか、当然そこには空き時間の先生が入ってくれたりして、そういう中で、学校に来ることができるようにすることをまず考えているところです。それでも不登校になった子どもを支援施設にお願いすることもあるのですが、できるだけ未然防止ということをまず私は考えているということです。

○平井小学校長会長 小学校でも、まずは子どもたちが学校に来るように、不登校の未然防止の取組が大事だと考えています。特に小学校では、子どもたち一人一人がやってみたいとか考えたいと思えるような授業を計画することが大事だと思っています。子どもたち一人一人がやってみたい、考えたいというような授業では、できたとか友達と一緒に考えて分かったとか新しいことに挑戦できた、そういうような思いが子どもたちの中に蓄積してくると思います。まずは授業づくり、それから先ほど中学校長会長が言われたように集団づくりですね。小学校では、帰りの会などで、友達のいいところをしっかりと見つけて発表しようねとか、そういうような取組をやっていることで、自己肯定感を高めるための取組をしています。

あわせて、教育相談週間というのを年に2回から3回、各校でやっております。先生が子どもたち一人一人の悩みに丁寧に寄り添う取組で、まずは学校が楽しいと子どもが実感できるような取組を続けています。その上で、担任の働きかけというのは、小学校では特に重要だと思いますので、学校に来にくい子どもには、担任が家庭訪問するとか保護者の方としっかり話をして課題を解決していくように努めています。さらに、それでも学校に来にくい状況になりますと、不登校児童生徒支援員が小学校にも配置されておりますから、その支援員が毎朝迎えに行き、学校まで寄り添って連れてくる。その上で、教室で見守ったり、教育支援教室のような別の部屋で一緒に関わったりして対応をしております。その部屋ではタブレットを使って教室へつなぐという取組も行っています。別室に登校できた子どもたちが、教室とつながるための手法としてタブレットというのはすごい役に立っているところです。

本校では、そよかぜ平福と連携をして子どもたちを育てています。学校に来にくい子どもをそよかぜ平福が受け入れてくださって、しっかり心に栄養を注いでくださっているお

かげで、ある子どもは登校ができるようになっております。その登校できるようになった子どもも心の力が少しなくなるときには、そよかぜ平福がメールシステムのようなもので簡単に連絡できるようにしてくださっているのです、その子どもはそよかぜ平福に連絡を取って、「また行ってもいいかな」というようなやりとりをして、そよかぜ平福と教室の往還をしているというような状況で、今日も元気に登校しておりました。様々なチャンネルで子どもたちが登校できるようなことを小学校では現在行っているところです。

○市長 ありがとうございます。

それでは、教育委員の皆さん方に移りたいと思いますが、どなたから。石井さん、お願いします。

○石井教育委員 いろいろお話をお伺いさせていただいたのですが、まず一番頭に入ってくるのは、教育長からご説明いただいた、この資料1の右側のグラフにある全国の出現率が、一方的に右肩上がりになっているという点で、このことを改めて目にしますと、一市民として、一保護者として強い恐怖を覚えるといいますか、怖さを改めて感じるころであります。これはもう配慮が必要な状況から社会的な大きな損失につながっていくのだらうなという意味で、改めて捉え直す必要があるのだらうと感じております。

その中でも岡山市のこの伸び方というのは、このグラフは横に長いので感覚的にあまり差がないように見えますけども、全国との差はかなり付いていて、今ご説明いただいた取組とか、それ以外も含めて、たくさん取組をされていることがかなり全国と比べて効いているのだらうなという印象をもっています。コロナが終わった令和5年度の数字は大事だと捉えさせていただきました。その中で今までご説明いただいたことを考えてみますと、今までの学校の枠組みを超えたところで何か新しいことをしないと、今までの枠組みではもうどうしようもないという状況にたどり着いていると捉えさせていただきました。

それからもう一つは、「そのままでもいいんだよ」という、そよかぜ平福さんのお話を聞かせていただいたのですが、今まで、私もその言葉を聞いて私自身がほっとしてしまったところがあります。何か「できなきゃいけない」とか、「これしなきゃ、あれしなきゃ、もっとこれできなきゃ」という部分がすごくあって、その中で、安心してできていたらいいと思うのですが、それがなくなると、走り過ぎた部分はないのかな、今までの考え方を改めなきゃいけないところが通常の学校の中でもあるのかな、ないかなというところを感じさせていただいたところです。

いろんな個別最適な取組というのでも聞かせていただいたのですが、どうしても人とお金

がすごいかかりそうだなという印象と、実際そうだと思いますが、それをどういうふうにかけるのか。制限があるのであれば、いかに未然防止の取組で何かできることがないのか、もっと探せることはないのかと感じています。あとは、日本の国だけに閉じないで、国の役割だと思うのですが、ほかの外国の考え方も取り入れて考えていただきたいなと思いました。

以上です。

○市長 じゃあ、片山さん。

○片山教育委員 ありがとうございます。いろいろなお話を伺って、率直な感想は何かいろんな支援が、一人一人が変わらなくて、あるがままのその子に合わせてもらえるという、その多様な視点でその子に合ったカスタマイズされた支援をつくっていただけているということにすごく感じました。不登校の未然防止ということかというと、先ほど吉備小学校の校長先生から伺った、1年生になった子どもが正門で泣いているところに1ヶ月間、寄り添ってもらったということが、支援教室で2、3ヶ月慣れるまでに時間がかかるところを未然に防げている。1ヶ月で何か防げているところもあるのかなという気がしました。

人を育てるという意味では、先生方から安心感をもらったり、それ以外にいろんな職員の方から安心感をもらうというところの大前提のところから、いろんなことに挑戦したりとか興味をもって取り組んだりとか何かそんなことがだんだんに進んでいけるのだなということを感じました。

一人一人の子どもたちが自分で何かできたという達成感とか、これなら自分ができるんだという自分に対する確信というのか、宿題をこれだけやったとか、ネットにつないで、これだけ授業を見たとか、自分なりにもやれた感じが目に見えるとか、うちの子も家庭学習の自主学習をしてシールを貼ってもらおうとすごく喜んで、シールが何個たまったら大きいシールがもらえるとかそういうご褒美というのも変なのですが、最初は外的な報酬というか、ご褒美であっても、それがだんだん内的に自分の力に、今度は自分で頑張ろうというふうになっていけばいいのかなと思うと、自分のがんばりが見える化されるといいなと思いました。

以上です。

○市長 ありがとうございます。

それでは、上西さん、お願いします。

○上西教育委員 今回会議の前にいろんな資料を見せていただいて、また今日もいろんなお話を聞かせていただいて、本当にいろんなケース、いろんな子どもに対して様々な取組がなされていることがよく分かって、すばらしいと思ったのですが、その中でも今日お話を伺った校内支援教室は面白い取組だなと思って、14名のうち、どのような学年の子どもが、不登校になりかけている子どもが来ているのか、不登校になっていた子どもが通い始めるようになるのか、その辺をもう少しお伺いしたいなと思いました。まだ始めて半年ということで効果がこれからでしょうけど、少し見守っていききたいかなと思いました。

それから、未然防止とか個々の子どもに合わせてとかいう話でいえば、ASSESSとか子どもへの質問紙調査の結果を生かすということは非常に大切で、いい素材、いいデータが入手できる状況にあるのかなと思いましたが、これもまた奥橋さんが言われたのですが、ASSESSがまだ活用が十分ではないという発言をされたと思うのですが、ノウハウの問題なのか、先生の余力の問題なのか、どこに力を入れたら有効にデータが活用できるか。そのあたりが興味深いなと思って、もし教えていただけたらよろしくお願いします。

以上でございます。

○市長 今の上西さんの質問に対して、奥橋さん、お願いします。

○奥橋小学校長 14人くらいの子どもの入れ替わり立ち替わりというところもあるのですが、多いのは低学年ですね。最初は教室に入れなかったのですが、学習に興味を持ってこの教室に入ったという者も当然いたり、給食だけはこの部屋で食べると、支援教室へ来る子どももいます。ほかの勉強は教室でできるのですが、給食の時間だけ、これはもしかしたらコロナの影響があったのかもしれない。マスクを取って食べるということに対する抵抗なのかもしれません。

最初、来室が不定期だった児童が4人ほど1学期の前半にいたのですが、だんだん自分でリズムができて、自分で曜日を決めるとか、時間、教科を決めるようになっていきます。感じたのは、多様化学校という感じで言われていると思うのですが、多様化教室に近い部分があって、45分間の授業のうち、この20分間を集中して勉強して、ここで休憩させてほしいということを先生に訴えとか、自分で時間割を設定しながらいくところが人気で、自分で表現でき出すと少しずつ変わってきているなというのは見えてはきました。

i-checkに関しては4月当初に学力アセスと一緒にやって、結果が返ってくるのが夏休み頃になります。そうすると、どうしても担任としたら4月の状態を1学期が終わって見ることになるので、新鮮さに欠ける部分があります。ただ、今うちが取り組んでいるの

は、その結果を見直してみると、確かにここに引っかかっている子どもが見えてくる部分があって、その兆候を昨年度から2年の取りためをすることによって、次年度の学年に上がる時にそのデータが生きるのではないのかなと考えています。しかし、そういうことを考察する余力がなくて、そういったあたりも大学と協力させていただきながら、いろんな本校のもっているデータを見て何か糸口が見つければいいのかなと思っているところで

○市長 ありがとうございます。

それでは、門原さん。

○門原教育委員 失礼いたします。今日ご発表を聞いて、会議の中で感じたのは、キーワードは「居場所づくりと友達とのつながり」というようなことだったように思いました。市の取組として、お二人の発表を聞くと、学校へ行きにくいとか学級へ入りづらい児童生徒に対して市が大変きめ細やかな指導をされていて、今文科省がやっている個別最適化のところできていて、本当に家庭から出られないのではなくて、出て、その後のフォローがすごくよくされているというところは非常にうれしく思いました。

お話を私が聞き逃しているかもしれない、そういう中でも子どもたちが成長しているという点を保護者と情報共有をしっかりとくださっていると思います。感じた成長を保護者に伝えると保護者も元気が出て、今まで学校や学級に対して、もし疑問をもたれていた方がおられたりしても、「子どもの成長をこんなに見守ってくださっているんだ」ということを感じられて、元気が出るのではないかなと思います。

それから、学級経営の中で集団づくりはすごく大事で、学校に来ている児童生徒は大半を授業で過ごしているので、分かる授業とかできる授業がすごく大事で、全ての授業がうまくいくとは限らないのですが、ちょっとでも子どもが楽しいとか、うれしいとか笑顔が出る。それから、そのためには先生たちが元気でないと、本当に先生たちがにこやかで元気でパワーがあったら子どもたちもがんばれると思いますので、そういうところの支援をこれから本当に考えていかないといけないと思います。

それから、中学校との接続のところは、どうしても何かまだ不足している、不十分なところだなと思っているので、やはり長いスパンで子どもの人生を見通していくということが大事なので、そのあたりも定量的には見えないかもしれませんが、今後を見通していくということも大事なのかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

では、中身について話してないのは私だけなので一言話させていただいて、それから5時までということで、時間がある限り、いろんなご意見があればお話しいただくということにさせていただければと思います。

私は高瀬先生がおっしゃった最終的な目標は減少だと。でも、減少に至らない間の指標があるじゃないかと。確かに不登校がどれだけ増えたか、どれだけ減ったかという指標だけで見えていくと、非常にそう簡単に減るものでもないし、何となく焦燥感というか、そういうものが我々の間に出てくるのではないのかなというように思って、効果における間の指標というのは何なのか。それをぜひ次の会議までに教育委員会、校長会等々で議論していただきたいというのが1点。

それから2点目は、私は何度か、この10年も市長をやっていますから、もう先生方とはよく接触するのですが、今おっしゃったように、先生方は元気でよくやっていると私は個人的には感じています。ただ両校長会の会長さんが2人、くしくも同じことを未然防止という表現、だから不登校になる前にどう対応するかということでしょうけども、ある面、明確化、一人一人は違うかも分かんないですけど、やることを明らかにしていく、ないしはそれを定量的にしていくということができないのではないかと。

それで、どうしても先生一人一人で見えていくと一生懸命やっていて、不安なことが多いのではないかなと。だから、そういう先生方にももちろん校長は寄り添っていく。そして、具体的な先生がやるべきことをできるだけ分かりやすく定量的に書いてあげることが重要なのかなと。そして、それを学校の会議の中でも議論してもらおうということが重要なかなと思ってまして、そういう未然防止に係る具体の先生方の行動をどれだけ明確に定量化していくのかも次の会に出していただけないかなと。これは事前の打合せでも教育長には申し上げたのですが、そんな感じがしているところであります。

今これで全員のコメントが出たので、それらに対して何かご意見があればお願いいたします。

教育長は最初の説明だけだから、何か言いたいことがあったら。

○教育長 私も高瀬先生が言われたからではないのですが、この指標については、ある意味、疑問をもってまして、全国的に下がらない指標です。この指標は、市長が言われたように元気が出ないですね、正直。

○市長 焦燥感というかね。

○教育長 そうなんです。

○市長 いらいらするね。

○教育長 行き詰まった感があって、毎年新聞で踊るのは史上最高の不登校の数です。本当に間の指標というのが、何日か改善できた子どもの数とか、そういったところに個別で出るのは大変ですが、教育長になってから、いろいろこの議論になる中で、確かに市長がおっしゃるとおり、間の指標でみんなの元気が出るというか、頑張ったなと分かるようなものが岡山型でできると、本当にすばらしいなと感じました。

○市長 例えば、不登校になった人がプラスで、そこから復帰したときだけ、そのマイナスがどれだけ減ったみたいな、そんな話だってあるでしょうね。

○教育長 あります。

○市長 どうですか、学校での実感は。校長会からお願いします。

○溝手中学校長会長 日々、子どもの様子に喜んだりするのが教員で、「今まで登校できなかったのに、今日はこの子は来られた」というのがあって、そのエネルギーをまた子どもたちにも返していく。登校できてないから家庭訪問して心配なんよと伝えることもある。そんなことの繰り返しで日々過ぎていくということで、今、市長さんが言われたように、やるべきことは少し整理したほうが勘とか経験に頼る部分が教員にはあるので、そこはi-checkとかASSESSとかを見ながら適切なことを考えていく、それこそカウンセラーの先生とか大学の先生とかと足並みをそろえろとか、指導をいただきながらやると、もっとよくなるかなとは感じています。

○平井小学校長会長 いい授業って何かというところが明確になってないと思います。いい授業とは何かということ全体を全ての教員が分かるということは大切なことだと思います。例えば、いい授業を全員で見るとか、何か方策を取って、それを配信できるとかして、いい授業というのはこういうことだよというものをお題目ではなくて実際に多く見てみるということが、まずはスタートなのかなというような気がしています。

○市長 高瀬先生、どうでしょうか。

○高瀬教授 さっき山内講師と話したのは、授業は先ほど平井校長さんがおっしゃいましたように、いい授業でないと多分子どもは学校に戻ってくることができないところがあって、では何がいい授業だろうということを考えたときには、1つは岡山市の場合は多分友達とつながりのある授業といえる。そのつながりの中に地域と関わっているとか、何かそうした部分手がかりにしながら、いい授業とは何かというのを見ていただいたときに、不登校の子が行きたいと思ったら、やっぱりいい授業だと思います。

何かそういう視点で岡山市の教育全体の中に不登校というものを位置づけていっていたけるといいのかな、そういうアイデアをどんどん出していただけるといいのかなと思いました。市長から大学も大分宿題をいただいたなとプレッシャーを感じつつ、山内先生と片山先生を見ていたところですけども、そういったことも一緒に考えさせていたきたいなと思いました。

○市長 ほかにどうでしょうか。

○奥橋小学校長 少し視点がずれるかもしれませんが、教育委員会がされているいろんな事業があるのですが、単独でつながってない部分を感じました。先ほどお話をしました岡山っ子スタート・サポートの事業は、教職員課がもっている事業ですが、実際に入ってみると、不登校の未然防止に非常に効いている部分があります。であれば、本当に担当課はどこがいいのかであるとか、またスタート・サポートというのは一定の配置基準があるので、配置できないところもあります。

そうなったときに、配置できないところで、学校ってどういうふうに対応できるのかな。大きな学校でも配置できない場合がありますので、そういったことを考えたら支援員の配置をもう一度見直すとか、もう少し柔軟に学校が動けるような形にしていくという検証も本当は要るのかなということを感じました。そんな視点で、もう少し横の連携をしていけば、学校がより動きやすくなって効果がてきめんに分かるものが出てくるのかなと感じております。

○教育長 市長、いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○教育長 いい授業かどうかというのは別として、クロームブックを利用して、教室の授業を一方向的に配信するのを今やっています。それを家で見る子どももいたり、校内支援教室的なところで見る子どももいたりして、授業の雰囲気を感じると、高瀬先生言われたように友達も若干分かるというか、教室の雰囲気が分かる。そして、教室復帰ができたという例も聞いています。だから、その辺もキーワードとしてはあるのかなと思って聞かせてもらいました。

○市長 教育委員会の事務局のほうも何か、次長、どうですか。

○島田教育次長 いろいろとお話を聞かせていただく中で、一つは現在登校できていない子ども、あるいは来にくい子どもへのサポートというか、対応、これは取組をお聞きする中で、それぞれの役割分担はありますけれども、しっかり連携をしていくことが重要であ

るということを感じました。より一層の連携を図ってまいりたいと思っています。それは先ほど奥橋校長先生がおっしゃられた教育委員会の取組についての連携というか、そのあたりのことも含めて必要だと思ったところでございます。

それからもう一つ、高瀬先生、それから市長からもお話がありました定量的なところ、確かに増加はしているものの、全国との開きという部分はこのデータで見ると感じるところでございますので、何が効いているのか、このあたりは集団づくり、漠然としているものではあるのですが、我々としてもしっかり検討してまいりたいと思っております。

○市長 私はこの総合教育会議をずっと長い間やっていて少し思うのは、一人一人の先生を不安にしないということが重要なのではないのかなど。先生自身は一人一人と接触すると非常にすばらしい方が多いのですが、どうしていいか分からないという不安をもっている人が多いというのが一つ。それからもう一つ、言い方がきついのかもしれないが、自己満足に陥って、「もうこれだけやっているじゃないか、結果こうでも、それはやむを得ない」というように思ってしまう。この2つを払拭していかないといけないのではないのかなど。そのためには何をやらないといけないのかが自分できちっと分かっている、それを校長さんとか教頭さんがどうフォローしてあげるのかということなのではないかなと思います。

それから、今日は本当に高瀬先生の話で思いましたけど、自分がやったことの結果ってどうなったかというところで、結果をマクロで見て、必ず上がっているという数字だけ見ていると、確かに焦燥感が出てくるのではないかと。それをある程度でも抑えるというか、そういったことをやっていくのは重要なんじゃないのかなというように思います。教育委員の4人の皆さん方、いろいろとご指摘もありましたし、そういう意見を踏まえていただいて、不登校問題というのは今もう全国的に大きな問題になっています。だから、来年度、エラーになってはいけないが、トライアル・アンド・エラーの要素だってないわけではないので、岡山市の教育委員会としてやってみることはやってみようというぐらいの感じで、ぜひ動いていただければと思います。よろしいでしょうか。

○教育長 はい。

○市長 よろしく願いして、そういう面では第3回目の総合教育会議というのは年度のまとめの話になりますから、来年度の義務教育についての教育委員会といいますか、総合教育会議の結論を方向性のものを出して議論させていただければというように思います。よろしく願いいたします。

今日は以上で終わらせていただきます。

○教育長 ありがとうございました。

○市長 事務局、お願いします。

○司会 ありがとうございました。

次回の会議は、改めて通知させていただきます。

以上で令和5年度第2回総合教育会議を閉会いたします。本日はどうもお疲れさまでございました。

午後4時49分 閉会